

ジャズトランペット奏者

日野皓正さん

Interview

アート・ブレイキーに言われた言葉
「自分を証明するな」が、
ずっと頭にあるんです

日本を代表するジャズトランペッターの

一人として知られる日野皓正さん。

そんな日野さんに、ジャズの魅力や音楽との向き合い方を伺いました。



■ **絵画の分野でも活躍されていますが、**

■ **きっかけは何だったのでしょうか**

「女房に“あなた、なんでゴルフの練習ばかりしてるの？ もう少しアーティストらしく生きなさいよ”って言われて(笑)。それじゃとキャナルストリートの画材屋で水彩の道具を買ってきて、ちょっと描いてみたのが最初。そこからハマっちゃった。もともと僕のおばあちゃんもお寺の襖絵を描いたり、おばさんはプロの絵描きだったりで、家系もあるかもしれないですね」

■ **マイルス・デイヴィスを筆頭に、絵を描くミュージシャンは多いですね**

「音楽と同じなんです。何も無いところから、譜面に音を置いていくわけだから。真っ白なキャンパスに色を乗せていく絵と、同じことなんです。科学の世界だってそう、閃きは向こうから来る。その声が聴こえる人は創れるわけ。“自分はすごい”と思ってる人は創れない。無になる。待つんです。新しいアルバムをリリースしたあと、しばらくなんのアイデアも浮かんでこないときは、“皓正、おまえはもっと人間を肥やして大きくなりなさい”って神様に言われてるということなんです。人間が大きくなったときに、また、アイデアをあげるよ、ってね。待たなきゃいけない

ときには、あがいてもダメなんです」

■ **待つ時間は苦痛じゃないですか？**

「楽しいですよ。音楽というのは空間なんです。空間がスイングさせる。多くの人は楽器から出てくる音でスイングしてると思うんだけど、待ってるときにいかにスイングするかが大事なの。次に何がくるんだろうってね。観客だってワクワクするでしょ」

■ **世田谷区の中学生で結成する「Dream Jazz Band」の指導もされていますね**

「教えるのはいろいろやってます。被災地の学生や、大阪のシニアバンドにも。子どもは脳みそが大人の100倍血がたぎってて、なんでもできるんです。でも今は、それを見い出してくれる先生が少なすぎる。導く立場の人があらゆる分野で不足してるんですよ。誰かのために何かをやるってことができない奴らばかりになっちゃって。僕だって、アート・プレイキーとか、偉大な先輩たちが育ててくれたんですよ。20代のときだったと思うけど、ライオネル・ハンプトンがアメリカ大使館でコンサートをやったとき、吹いていいよ、って言われてね。ドキドキしながら吹いたら、おまえはすごいいいファイア(情熱)を持ってる、それを大事にしろ、と言ってきて。先輩たちが可能性を持った息吹にはチャンス

あげなきゃいけないと教えてくれたんです。向こうの人は、おまえは最悪だとか絶対に言わない。褒められれば、ああ、よかった、一生懸命やろうってなるでしょ。怒るのも大事だけど、褒めるのも大事。“ドリバン”では怒ってばかりだけど(笑)」

■ どんなことで怒るんですか？

「人としゃべるときは目を見て話せ、とかね。あとは、ごめんさい、ありがとう、これが言える人間にならないとダメになるんだって。今でもたまに卒業生から手紙をもらったりするんだけど、“スリッパ事件を私たちは忘れません”なんて書いてあって。ある日トイレに入ったら、スリッパの先がこっち

を向いてたことがあって、すごく怒ったんです。“おめえら、自分のことしか考えてねえだろ。次に来る人がずっと足を入れられるように向きを直すのが当たり前だ！”ってね。次の週に行ったら、ちゃんとできてた。もう涙が出てきちゃってね、僕が言ったことを覚えていてくれたんだって。今は、人間として大切なことを教えられない親が増えちゃったからね。僕たちが子どもの頃は、先生はバンバン手を上げたし、バケツ持って廊下に立たされたりなんてこともしょっちゅうだった。うちの息子なんかは3歳の頃でも嘘ついたらお尻出させてね、叩いたりしてましたよ」

可能性を持った息吹にはチャンスをおげないと

■ 息子さんたちも音楽の道に進まれた。

■ お父さんへの憧れもあったんでしょうね

「長男はギターを作ってます。彼は学校が終わると47丁目のギターショップに遊びに行ってたんですよ。次男の賢二は音楽と美術のハイスクールでトランペットの科に入ったんだけどね、長男の誕生日にフェン

ダーのベースを買ってやったら、賢二がそれを取り上げて。上手いんですよ、いきなり。それでベーシストになっちゃった。ある日、ジャコパス(エレクトリックベースに革命を起こした天才ベーシスト、ジャコ・パストリアス。1987年没)に出くわしたら、“おまえの息子は俺の弟子だからな！”なんて言われたこともありましたよ」

■ すごい！ 他にも、多くのジャズジャイアンツとのエピソードをお持ちですよ

「エピソードというか、いろいろと教えてもらいました。30代の頃、ヨーロッパのあるジャズフェスで、本番後にホテルのバーで出演ミュージシャンたちみんな演奏して遊んでたら、アート・ブレイキーが“日野、



インタビュー前、1分ほどでサラサラと描かれた日野さんのイラスト

75歳過ぎてもバリバリ吹ける トランペッターに

やるか”なんて言って。嬉しくて、はりきっちゃったんですよ。そしたら後で“日野、自分を証明するな”って言われたんです。その言葉が、ずっと頭にあるんですよ。いつも、今日は証明しないぞ、と思ってステージが上がっても、5分くらいすともう証明してる自分がある。またやっちゃったよ、って言いながら何十年です。60歳を過ぎた頃に、ひょっとしてこの言葉は、アートも誰かに言われたんじゃないかなってふと思ってね。それと闘って、あの人も死んでいったのかなって」

自分を証明しないというのは、必要以上のアピールをしないということですね？

「俺が俺が、ってやらなくてもいいんだよ、必要以上に見せびらかしちゃういけない、ってことですね。自分の証明じゃなく、天のメッセージをいかに正しく伝えるかがミュージシャンの使命なんです。天が言ってるんですよ、戦争はダメ、憎んじやダメよ、って。ダメなことはちゃんとと言わなきゃいけない。それを、音楽で伝えるんです。不満があったら楽器を使って言うのがミュージシャンだからね」



お酒もやめてずいぶん経つそうですが、スティックな生活を選んだきっかけは？

「75歳過ぎて、日本人でバリバリ吹いたトランペッターっていないんですよ。僕が最初のそれになろうと思って、45歳のときに酒はやめました。明日のことは分からないけど、燃える力があれば何歳になってもできるからね。そのときにプラスになるためには無駄なことはしない方がいいなと思って。目的があるとそうなるんです、人は」

profile

日野皓正さん

東京生まれ。9歳からトランペットを始め、13歳頃には米軍キャンプのダンス・バンドで活動を開始。“ヒノテルブーム”を巻き起こす。その後N.Y.を拠点に活動。89年には日本人として初めてジャズの名門ブルーノート・レコードと契約を結ぶ。現在もジャズシーンを代表する国際的アーティストとして世界各国で精力的なライブ活動を行っている。